

六花 8



2019

りっかはいぐかい

山田六甲

頭智州作山津山勝

鎮

弟充彦享年74歳七月二日

水雲院禪峰充道居士梅雨最中
足許のよろけて薔薇をつかみけり
泪拭く汗拭く伊予の暑さかな
自ずから然りと沙羅の散りにけり
沙羅の寺綺麗に生きる人と来て
夏霧を生み播州の山と山
沙羅に水浄められたる緋鯉かな
そもそもと蛙出てきて留守の寺
沙羅に留守東司を借りて帰りけり
白が湧き緋が湧きぬたる沙羅の池
耳元を飛び行く蠅の戦闘機
石斛に気が付いてゐる二人かな

蜘蛛の糸つつと一滴走りけり
かんだたの池の上なる蜘蛛の糸
本堂は留守なり黴と香匂ひ
仏古い鶯も古い沙羅の寺
実りても鴉も食はず藤の豆
手を取つて色鯉の池巡りけり
モツチリの食後クリームソーダ水
鳥の声かたばみに降る寺の池
梅の実のすでに挽ぎあり留守の昼
夏霧を生んで播州平野かな
梅雨明けや空の上には天のあり
もうないと思へどありし沙羅の花
五十昭に誘はれて来し沙羅の寺
樹の下に午睡長者となりけり

雪嶺抄

京薄暑

笹村 政子

川に沿ふ廃線いまも上り鮎
てのひらを躍る小鮎のこそばゆし
葬送の子女のオルガン花ミモザ
カーテンのピアノに触るる暮春かな
口開けて貌の隠るる燕の子
六月や犬をもらひに美容院
麦秋や風の中なる塚一基
京薄暑お香の店に入りにつけり
色町の奥に子の声日の盛
夏霧の流るる祖谷の川湯かな

友進く

高華抄

青岬

佐津のぼる

蜂働くととのふて来し巢のかたち
矢車の音の残れる空暮るる
早苗月ほどよき田水ゆきわたり
含羞のさまの色づき実梅熟る
密生の丈余に伸びて芦青む
掃き溜めて焚くほどもなき夏落葉
スカーフに風をあそばせ青岬
虹くつきり雨すつきりとあがりけり
磨る墨のひときはにほふ梅雨の入
磨かねば言葉も靴も黴びるもの

蝸牛の道光りたる石に座す

田尻 勝子

青葉風日永ささやきささやいて
睡蓮の葉の裏返りたる悲鳴
紫の薔薇の群れだけ静もりて
蝸牛の道光りたる石に座す
牛蛙明石の正午の眠たかり
糸蜻蛉存在直ぐに消えにけり

でんでんのみちひかりたるいしにざす たじりかつこ

蝸牛（でんでん・かたつむり）と蜻蛉（なめくじ）はまあ似たり寄つたりでんがな。

「ななんでや?」、「殻があるか無いかや……」そういうもんかなあ。いやいやそういうことじゃあなくて、じつと見ていたらこんな虫でも来し方は光り輝いておるのや、そこへ坐るといふのは許せんのだす。

あても、しつかり俳句詠んでこの世に軌跡を遺さんとあかんなあ……。と魅入っているのやろうなあ。実に虚無的やなあ。ほんで蝸牛のこと「ででむし」（出よ出よ）が転化して「でで虫（でんでん）」というが、カタツムリの語源は長くなるので略す。

藤よりも雄の匂ひのする孔雀

延川 笙子

山清水もてなす昔乙女かな
若葉して橋のたもとの常夜灯
あんぐりと串に刺されし山女かな
勝山の漢ラムネを冷しをり
焼き討ちにされたる寺の藤五尺
藤よりも雄の匂ひのする孔雀

ふじよりもおすのにおいするくじやく のぶかわしようこ

孔雀（クジャク）のような大きな鳥が恋に目覚めると、強いフェロモンをまき散らすのを嗅ぎ取った。漢にはない嗅覚。女性の笊子はそれを「雄の匂い」だと嗅ぎ取った。男女均等法のうるさい今日でもこればかりは不均等であるから子孫が反映する。一方藤は独特のフェロモンのような臭いがするが、しかしフェロモンは出ていないのだ。男には詠えない神秘的な世界。女性だけが嗅ぎ取れる感覚であろう。「よりも」と言うのは藤の花の匂いよりも、孔雀の雄の匂いに惹かれた女性の詠んだ句であり、なまめかしい句である。

雪卿集 せつけいしゆう

藤生不二男

善野 行

花は葉におそき郵便とどきけり
水底に光走れり上り鮎
溝川に背鰭動めくにごり鮎
白昼の暗みてきたる牡丹かな
頼りなく風にふかるる蛇の衣
若葉雨ひとすぢごとに光りけり
白鷺の黙貫ける水田かな
玉虫の仕舞ひわすれし翅みだら

藻の上の速き流れや夏兆す
迎春花「照千一隅」の碑と対かひ
白藤のにほふ間合のありにけり
世の中は御代替りとか畦直す
薪能般若をしのぐ青葉冷え
紀の国のいばらのにほふ岬かな
黄菖蒲の光ばかりの水辺かな
城垣のよろしき反りとなる五月

志方 章子

出口 誠

いくつもの声色に鳴き春の鴨
船笛の寝ぼけし音や春の昼
紫木蓮粋な女の風情にて
桜貝拾ひ昔日よみがへる
これからは令和を生くる初桜
一駅を乗り過したる夕桜
満開の桜一世のあと少し
うららかや心の闇を誰も知らず

つつじ咲く平成時代最後の日
春雨に濡れて平成最後の日
芝桜令和元年一日目
ネクタイが五月の風と遊びけり
母の日や会ふべきところを電話して
はき慣れぬ靴の痛みよ新樹光
母の日の酸味の強きワイン飲む
初夏が来て友も来てゐる居酒屋に

住田千代子

ゆうるりと鯉うごきをり芹の水
屋根替への空を乱せる音のあり
蝶々の風ゆらゆらと過ぎゆけり
清らかに咲くは侘しき利休梅
日の粒となりて飛びたつ天道虫
散りぢりの行方は知らず袋蜘蛛
雨粒の光こぼせる菖蒲かな
夏めくや白き項の後れ髪

永田万年青

春光や樹々のあはひの紅い橋
てふてふの草むらを出てもつれけり
緑さす中に三重塔のあり
更衣古着自慢の女かな
若葉光褪せし仁王の睨みかな
牡丹桜曲げて地蔵の上に咲く
若鮎のひかり浅瀬を遡上せる
行く人を薄目して追ふ薄暑かな

升田ヤス子

看護師に見せる疵痕夏兆す
夏の夜の幻に視る摩天楼
織月をめざし若鮎飛びにけり
もう鮎とわかる香りに釣られけり
瓜の花遊び蔓にも咲きにけり
烏瓜夜の帳にすがり咲く
捕虫網一ひねりして牢なる
門先に玉苗置かれありにけり

谷口一献

新緑の上を撫で行く鳶の影
緑さす人力車夫の鱒背かな
新緑の淡路の近くなりけり
新緑や昨日今日明日明後日も
もの想ふ刻の流れや藤の波
牡丹の妖しきまでに紅に
香水のほのかに残るうなじかな
機嫌良き日の妻の声薄暑かな

雪樹集

赤松 赤彦

延川五十昭

若鮎の先頭切つてさばしれり

夕薄暑湯屋と見まがふ紅暖簾

若鮎の遡上遮る鳥の影

みぎ出雲ひだり大阪夏つばめ

この先はもう行き止まり犬ふぐり

耳欠けし青磁に生ける白牡丹

茅葺の寺の門前春惜しむ

骨董の茶釜かたむき山笑ふ骨

ぼうたんをいきなりしがむをみなかな

春火鉢赤い襷の乙女かな

何か良きものを引きずる蟻のゐて

帰りけり女相撲を明日にして

延川 笙子

廣畑 育子

山清水もてなす昔乙女かな

古寺の山はなだらか竹の秋

若葉して橋のたもとの常夜灯

ぽつてりと白藤の空晴れにけり

あんぐりと串に刺されし山女魚かな

ペン先に揺らされてゐる毛虫かな

勝山の漢ラムネを冷しをり

谿川に傾ぐ一本桜の実

焼討ちにされたる寺の藤五尺

初鳴や三重の塔見上ぐれば

藤よりも雄の匂のする紅雀

囀の溢れゐる中足湯かな

平居 濤子

田尻 勝子

母の日や洗濯物の宅配便

青葉風日永ささやきささやいて

葛の葉のタワーに入りて風をきく

睡蓮の葉の裏返りたる悲鳴

八橋を蜂に先導されてをり

紫の薔薇の群れだけ静もりて

降り立てば青田の迫る無人駅

蝸牛の道光りたる石に座す

油絵の匂ひの充てる梅雨の部屋

牛蛙明石の正午の眠たかり

梅雨の蝶晶子の歌碑に止まりぬ

糸蜻蛉存在直ぐに消えにけり

江見 巖

大内 幸子

母の日やちよぼと点とが離れずに

改元の目覚めの庭の花みづき

半球の入れ替はりたるみどりの日

屋敷跡ソーラー敷き詰め松の芯

潜水艦浮き上がりては夏に入る

見はるかすひしを会社の麦畑

新樹の夜グラスに注ぐブランデー

リラ冷や仕舞ふエプロンまた付けて

燈籠に被さつてくる青葉かな

輪になりて子等との逢瀬藤の下

夜釣火や警戒心の薄れくる

平成や戻りは令和聖五月

六花集

篠原 敬信

道なりに続くつつじの花の帯
天道虫登りつめたる草の先
川風や園児に百の鯉幟
更衣変らぬ色のランドセル
岩間の音の中より若い鮎

磯野青之里

石川 憲二

畦塗や鋤簾捌きに土光る
指間より土に落して種蒔けり
葉先まで上り翹出す天道虫
薫風や淡きストール草木染
母の日や背中丸めて爪を切る

菊谷 潔

北村ちえ子

枯枝に若葉しげらす虫養ひ
一年にたつた一度の桜かな
よく見れば若葉のかげの柿の花
夏近し着ぐるみ脱いでその上は
夏近し何もてなすぞこの暑さ

夏のれん通りすぎたる人の影
夏のれん嵐の中で舞ひ上がり
夏のれん日なが一日惰眠する
夏のれん児の顔見たくもち上げる
夏のれん座敷を飾る今日からは

蛍雪譚 山田六甲

磯野青之里

畦塗や鋤簾捌きに土光る

印南野は黄金色へと麦の秋

石川 憲二

鋤簾捌（じょれんさばき）とは、平らな畝で畦の土を仕上げる作業。左官が壁土を仕上げるように平らに撫でて艶がでるほどに塗る作業のような鍔さばきを畦に塗る場合を鋤簾さばきとい

通常の俳人は「黄金色なる」とするがそうすると並みの句に終わるその辺りを苦しんだのだろうが、黄金色に変化しているとしたのが佳い。

篠原 敬信

天道虫登りつめたる草の先

人の経験しただろうが、土は何度も撫でてやると艶が出てきてガラスのように円む。畦の仕上げもそれに準じて艶がでるほどに撫でる。そうすると水が洩れない畦が出来上がる。もう職人芸である。

この句ある意味で滑稽。天道虫が上り詰めたと思いついでいるが、実は草の先が固ければ空に向かつてであり、草の先が垂れていけば逆さまに上ったと言う矛盾にあるのである。ヒトもそのようなことがある。上り詰めたのもつても実は逆の場合もあるのである。

